



失われた年月を越えて

岡崎 金造 有限責任中間法人
日本エレクトロヒートセンター 特別会員

設立 20 年の年月を経て、日本電熱協会が新しく有限責任中間法人日本エレクトロヒートセンターとして生まれ変わりました。協会発足から電気加熱の普及促進を会員共通の想いとして共有しながら、活動の端に加えさせて頂いた身としては、長年の課題であった協会の法人化ができたことに、深い感慨を覚えずにおれません。

協会設立以来の歩みは、俗に失われた 10 年とも 15 年ともいわれる年月の真っ只中にありました。協会会員のほとんどは、電気加熱製品の製造や加熱技術を利用した種々な製品の製造など物作りの中で生きており、この間の設備稼働率低下や設備投資停滞・生産拠点の海外移転などの状況は、会員各社にとって腐心の経営を強いられることとなった様に思います。このことは任意団体であった協会の会勢にも、直接に強い逆風となって影響しましたが、この期間が全くの不毛の時であった訳ではなく、日常の地道な活動や会員各社における絶え間ない製品の改良開発は、着実に加熱システムの効率改善や用途拡大を支える基盤となりました。

直流アーク加熱システムの商用化、誘導加熱への最先端インバータ技術の応用、ヒートポンプの性能改善等々を例として、その成果を見出すことができますし、電化厨房の普及促進には協会活動が大きな推進力となっております。正に失われた年月を越えて、明日に向けた可能性を継承していると言えますが、その可能性を次世代に開花させることが、新しいセンターに期待されることと理解します。

現在会員各社には多岐に亘る社会的責務の達成が求められておりますが、エネルギーの高効率利用や資源の有効活用、環境に調和した社会や産業の営みの具現化等々は最も重要な課題でありますので、ここから派生する様々な社会的ニーズを的確に捉え、価値のあるソリューションテーマとして発掘し解を提示していくことが、明日にむけた電気加熱の使命であると考えられます。物を温めたり冷やしたりする行為は家庭から産業分野のあらゆる場面に登場しますので、電気加熱技術の特長を最大に生かしながら、熱源の転換や効率の向上等に展開していくことが、課題を解決するための有効な方策であり、活躍の機会は確実に増えると確信します。

しかしながら 1 バレル 80 ドルを超えるような石油価格に代表される、信じ難いほどの資源価格高止まりの状況のなか、資源小国のわが国では物づくりそのものが危機に陥ることも予見されることや、生産活動のグローバル化が定着しアジア各国からの技術の追い上げも激しいことなどを考えると、電気加熱の一層の普及とそれによる事業発展の実現には従来以上の知恵と工夫が要求されものと予測できます。

このような市場の要求を達成するには多くの困難を伴いますが、その克服の過程は技術発展への道となることが多く、歴史的にもここから多くの新製品や技術が生まれてきております。新しいセンターは正にそういった社会環境の大きな変化の中で、電気による加熱に加え、冷熱の分野をも取り込んだ新しい活動を展望しながら誕生したといえます。活動対象の分野は大きく広がるわけですが、物づくり日本の更なる活性化のひとつの柱として、電気加熱技術の貢献度が高まる様なセンター機能を期待します。

(おかざき きんぞう) (株)日本 AE パワーシステムズ 常務取締役 技術本部長